

英雄の帰還

— *Sir Gawain and the Green Knight* における Return-Motif —

新 居 明 子

中世のロマンス、中でも特に「ブリテンもの」と呼ばれる Arthur 王ロマンスを扱う作品には、一般に return-motif として知られる典型的なパターンが見られる。ここでは、英雄は冒険を求めて Camelot を出発し、冒険に成功を取めると名誉に満ちて Camelot へ帰還するのが常套である。¹ ところが、*Sir Gawain and the Green Knight* (以下 *SGGK* と略す) における英雄 Gawain の帰還は、名誉に代わり自らが犯した過ちに対する沈痛な悔悟の情に満ちたものになっている。これは、従来 of Arthur 王ロマンス群に見られる return-motif のパターンから、少々逸脱していると言えるであろう。

この逸脱が、*Gawain-Poet* の意図するものだとすれば、その意図するところは何であろうか。そしてまた、そこにロマンス詩人としての作者の独自性を読み取ることはできないだろうか。本稿では、*Gawain-Poet* が Gawain の Camelot への帰還を従来 of パターンから外した原因を、彼のキリスト教的倫理観という視点から考察する。その際、ロマンスの主人公にあるまじき Gawain の過ちや、作品の構成上重要な役割を担う告解の秘跡を取り上げることは、*Gawain-Poet* のキリスト教的倫理観を明かにするうえで有益であると思われる。そこでまず、Gawain の犯した過ちとは一体何であるのかを再検討し、次に、*SGGK* における三つの告解の秘跡をそれぞれ具体的に検証する。ここでは特に、これまで軽視されがちであった Camelot における第三の告解の秘跡の重要性を強調したい。以上の考察を踏まえ、最後に、*Gawain-Poet* のキリスト教的倫理観を明らかにすると同時に、Gawain の帰還が return-motif からの逸脱によって示唆するものを探ることにする。

I

Gawain の過ちについての議論を進める前に、まず *SGGK* において *return-motif* がどのように扱われているか、具体的に触れておく必要があるだろう。Arthur 王ロマンスの伝統に従って、やはり *SGGK* も Camelot で物語の幕を開ける。そして主人公 Gawain は、Green Chapel で Green Knight と対決した後再び Camelot に帰ってくる。彼は宮廷の人々の歓待を受け、自らの冒険の詳細について語る。従って、Camelot に始まり Camelot に終わるという、*return-motif* の基本的パターンは満たされていると言えるであろう。² しかし、それにもかかわらず、Gawain の帰還にはそのパターンからのなにかの逸脱が見られるのである。

Gawain が自らの冒険談を語る際の様子は、以下のように描写されている。

. . . þe lace at þe last.

þe nirt in þe nek he naked hem schewed

þat he laȝt for his vnleuté at þe leudes hondes
for blame.

He tened quen he schulde telle,

He groned for gref and grame;

þe blod in his face con melle,

When he hit schulde schewe, for schame. (2497-504)³

彼は、自らの過ちと不誠実の証である緑の帯の一件を語る際、その語る務めに苦しみ、恥ずかしさの余り赤面するのである。この Gawain の有様は、*return-motif* にある名誉に満ちた帰還というのが一応のパターンであるとするれば、そこから逸脱していると言える。

なぜ Gawain がこのような沈痛な様子で帰ってくるのかと言えば、Bertilak 城において犯した過ちを恥じているからに他ならない。彼の過ちとは、Bertilak 城の城主との約束に反して、緑の帯を隠し持っていたことである。Bertilak 城において Gawain が奥方から誘惑される三日間というのは、彼が城主と exchange of winning, つまりその日に得るものは何であれ交換するという約束をする三日間でもある。城主の “*prid tyme þrowe best*” (1680) という警告に示されるように、三日目こそ Gawain の誠実さが最も試される日だったのである。問題の最終日に、彼は奥方から三度のキスの他に緑の帯を贈り物として受け取る。この帯は、

For quat gome so is gorde with þis grene lace,
 While he hit hade hemely halched aboute,
 Þer is no hapel vnder heuen tohewe hym þat myȝt,
 For he myȝt not be slayn for slyȝt vpon erþe. (1851-54)

という奥方の言葉から明らかなように、身につける者を守るという一種の魔法の帯である。そして Gawain は、この帯について誰にも口外しないと奥方に約束する。その晩、城主の獲物であるキツネの皮と交換に Gawain が城主に与えた物は、三度のキスのみ。肝心の緑の帯については一言も触れていないのである。

この Gawain の振舞の理由を、Jan Solomon をはじめ幾人かの評家は以下のように主張している。

Here the dilemma centers about the green girdle. The terms of Gawain's bargain with his host make it a breach of loyalty for Gawain to keep the girdle. On the other hand, the Lady has demanded secrecy; to turn the girdle over to the Lord of the Castle would be an equally disloyal act.⁴

しかし、Gawain が帯を受け取る際の状況を考慮すると、このジレンマ説は少々的を逸していると言わねばなるまい。緑の帯の効力を理解した Gawain の心にすぐさまある考えが浮かぶのである。

Hit were a juel for þe jopardé þat hym iugged were:

When he acheued to þe chapel his chek for to fech,

Myȝt he haf slypped to be vnslayn, þe sleȝt were noble. (1856-58)

誰にも口外しないという奥方との約束は、翌日の Green Knight との対決を控えた Gawain が、この帯は我が身を守るための “juel” になり得ると思つた後なされたものである。このことから、Gawain は奥方との約束以前に、既に城主との約束を反古にし、緑の帯を隠匿するつもりであったと考えられるのである。

従って、Gawain の犯した過ちは、彼の “vnleuté” (2499) つまり disloyalty にあると言える。そして、この “vnleuté” と “vntrawpe” (2383, 2509) は、どちらも城主との約束を破棄する Gawain の「不誠実」を意味している。⁵ というのは、以下の *OED* の定義から明らかなように、Gawain-Poet らが活躍する時代には、truth に loyalty の意味が含まれていたからである。

I. 1. a. The character of being, or disposition to be true to a person, principle, cause, etc.; faithfulness, fidelity, loyalty, constancy, steadfast allegiance. . . Now rare or arch. . . 2. a. One's faith or loyalty as pledged in a promise or agreement. . .⁶

Gawain をこの “vnlewté” あるいは “vntrawpe” に導いたのは、彼の “coudise” (2508, 2273, 2374, 2379) である。彼は、翌日に迫った Green Knight との「首切り」の約束を恐れ、自らの命を惜しむあまり、身につける者を守るという緑の帯を奥方から受け取るのである。従って、後述する

Gawain の告白に示されているように、Gawain の過ちは、彼が臆病風に吹かれた結果、換言すれば、騎士としての約束よりも自らの命を重んじた結果と言える。

Gawain が、緑の帯に施された美しい刺繍等に魅了された訳ではなく、その効力を欲したのだということは、彼と奥方の間で交わされる一連のやり取りより明らかである。Gawain との思い出のよすがとなるよう、奥方はまず彼の手袋を求めている。これに対し Gawain は、自分の手袋など奥方に贈るに値しない品であるとして、礼儀正しくかつきっぱりと拒絶している。そこで奥方は矛先を変え、彼女の豪華な指輪や、問題となっている美しい緑の帯を受け取るよう強要するのである。しかし、ここでもやはり Gawain は、騎士道的礼節でもって奥方の申し出を断っている。この時点で Gawain が、贈り物を受け取る意志を全く持っていないことは、“I haf none yow to norne, ne nojt wyl I take” (1823) という彼の言葉に明言されている通りである。⁷ Gawain が、一度拒否した緑の帯を受け取ることを承諾するのは、奥方がこの帯の持つ魔力について語った後のことである。この一連のエピソードによって、Gawain が帯を受け取る動機が明らかにされ、彼の臆病さは強調されていると言える。

従って Gawain は、城主との約束を破棄することで、loyalty と prowess という二つの美徳を喪失する。この二つは、Gervase Mathew が、“Two virtues above all were held to mark the good knight and bring him honour. They were prowess and loyalty.” と指摘しているように、⁸ 中世ロマンスにおいて最も重要視される騎士道的美徳である。Gawain は、騎士たる身に不可欠なこれら二つの徳の喪失を悟り、Camelot では自分の冒険談を恥辱にまみれて語らねばならないのである。

ロマンスの主人公は、一般に理想化される傾向にあると言えるであろう。⁹ そのため多くのヒーローは、騎士道に必要な礼節、寛大等の美徳を兼ね備えた、完璧な騎士として描かれている。¹⁰ その結果、ロマンスの主人公は現代

人の視点から見ると、あまり個性を感じさせない類型化されたキャラクターになりがちとも言える。ところが、*SGGK*における Gawain はどうであろうか。騎士として最も必要な *loyalty* と *prowess* を喪失するという点から見れば、Gawain は、ロマンスにおける理想的英雄像から外れてしまっているのである。

イギリス中世文学上において、元来 Gawain は、完徳の騎士の代表格として評価されてきた。¹¹ これは *The Squire's Tale* で Chaucer が “That Gawayn, with his olde curteisye” と語っていることから明らかである。¹² *SGGK* においても、緑の帯を受け取るまでの Gawain は、“pentangle” の騎士として、理想化されて描かれている。“pentangle” とは、Gawain の楯に描かれている五稜角星の紋章のことであり、*loyalty* を象徴する。さらに、その楯の内側にある聖母像は、常に彼に *prowess* を授けるとされる。そして、この楯の持ち主 Gawain の振る舞いは、その紋章に恥じることのない “gentylest knight” (639) に相応しいものとして称えられている。そもそも Gawain の冒険の発端である Green Knight による「首切り」の挑戦を受けて立つことができたのは、名高い Arthur 王宮廷の円卓の騎士の中で Gawain 唯一人である。また、Bertilak 城にて彼が受けた、奥方によるあからさまな誘惑に対しても、常に彼は礼節の騎士に相応しい態度を貫いている。

Gawain が、このような彼の美徳の象徴である “pentangle” の道から外れ始めるのは、奥方から緑の帯を受け取ってからのことである。魔法の帯を隠匿したいがため、その晩城主と獲物を交換する際、“As is pertly payed pechepez pat I azte” (1941) と帯については一切触れず、言わずもがなの嘘の供述をしてしまう。緑の帯を隠し持つという過ちを犯したがために、完全な騎士道的美徳を備えているはずの英雄 Gawain は、今や Green Knight との対決を恐れるあまり、約束を破り嘘までつくという人間的性^{まが}に翻弄される臆病者 Gawain に変貌しているのである。

II

SGGKには、例えば先述の Gawain の楯の内側に描かれているマリアの画像をはじめ、神や諸聖人に対する Gawain の敬虔な祈り等に代表されるように、実に至るところにキリスト教的要素がちりばめられている。ただこれは SGGK のみに限られたことではなく、Martin S. Day が “Extensive Christian references, though sometimes merely conventionally superimposed” を、中世ロマンスの特色の一つとして挙げているように、¹³ ロマンスにおいては、一種の慣習として騎士道と宗教が結び付けられている。しかし、SGGKに見られるいわゆる三つの告解の秘跡のパターンは、単にロマンスの特色としてのキリスト教的要素と割り切ることでできない程の重大な役割を、物語の後半部において担っているように思われる。そこで、ここでは Gawain の行った三つの告解の秘跡が、実際どのようなものであるのか、またどのような意味を包含しているのか、具体的に探りたい。

理想的騎士像の枠組みから外れてしまった Gawain が、自らが犯した過ちを悟るのは、Green Chapel において Green Knight と対決する時である。その際 Gawain は、Green Knight から首を撥ねられるかわりに、首に軽い傷をつけられる。そして Green Knight の説明により、実は彼は Bertilak 城の城主その人であること、さらに奥方の誘惑についても緑の帯についても承知の上であること、斧を三度打ち下ろしたことは、Bertilak 城での三日間にわたる exchange of winning の取引の結果に一致すること等、自らが受けた試練についての事の真相を告げられる。つまり、Gawain が一度目と二度目には無傷であったにもかかわらず、三度目に軽く傷つけられたのは、三日目に奥方から受け取った緑の帯を隠置し、城主との約束を破棄したからなのである。首に受けた軽い傷に示唆されているように、Green Knight は Gawain に、

Bot here yow lakked a lyttel, sir, and lewté yow woneted;
 Bot þat watz for no wylde werke, ne wowyng nauþer,
 Bot for þe lufed your lyf; þe lasse I yow blame. (2366-68)

と優しく言葉をかけ、彼の過ちに対し寛大な態度を示している。一方 Gawain は、自らの過ちを深刻なものとし、沈痛な面持ちで語りかける。

To acorde me with couetyse, my kynde to forsake,
 þat is larges and lewté þat longez to knyȝtez.
 Now am I fawty and falce, and ferde haf ben euer
 Of trecherye and vntrawþe: bope bityde sorȝe
 and care!
 I biknowe yow, knyȝt, here stylee,
 Al fawty is my fare (2379-86)

悔悟の情のもと、“I biknowe yow” と罪の告白をする Gawain に対する Green Knight の返答は、再び寛大なものである。

þou art confessed so clene, beknownen of þy mysses,
 And hatz þe penaunce apert of þe poynt of myn egge,
 I halde þe polysed of þat plyȝt, and pured as clene
 As þou hadez neuer forfeted syþen þou watz fyrst borne. (2391-94)

Green Knight は、先刻なされた Gawain の告白が彼の過ちを清め、斧による首の傷により罪は償われたと語る。

両者の会話に見られる “biknowe”, “penaunce”, “pured” 等の教会用語からも伺われるように、ここでは明らかに告解の秘跡が意識されている。つまり、既に J. A. Burrow をはじめ多くの学者が指摘するところであるが、こ

ここでは Gawain が罪を告白しその贖罪をする改悛者の役割を、そして Green Knight が Gawain に赦免を施す司祭の役割を果たしていると言える。¹⁴

あるいは厳密な神学上の見地からすれば、これは告解の秘跡であると断言するだけの、外的状況が満たされていないかもしれない。実際には Green Knight は司祭ではなく、Green Chapel もいわゆるフォーマルな意味での教会ではない。それどころか Green Knight と悪魔との関係も議論されている。¹⁵ しかしながら、当時その場に司祭がいない場合、平教徒への一時的な告白は有効と見なされていたことや、¹⁶ 先述の Gawain と Green Knight との間で交わされた会話の様子を考慮すると、やはり *Gawain-Poet* は、secular な形での告解の秘跡のパターンを意識していると思われる。

実のところ Gawain は、Green Chapel における secular な告解の秘跡の前に、既に正式な秘跡を済ませている。Bertilak 城滞在の最終日、Gawain は奥方から緑の帯を受け取った後、城の礼拝堂へ赴くのである。

Preuély aproched to a prest, and prayed hym pere
 þat he wolde lyste his lyf and lern hym better
 How his sawle schulde be saued when he schuld seye haþen.
 þere he schrof hym schyrly and schewed his mysdedez,
 Of þe more and þe mynne, and merci besechez,
 And of absolucioun he on þe segge calles;
 And he asoyled hym surely and sette hym so clene
 As domezday schulde haf ben diȝt on þe morn. (1877-84)

これは、Gawain が城の礼拝堂付司祭に対して行った正式な告解の秘跡の描写と言える。

しかしながら、形式的には正式なものと認め得るものの、ここにひとつの問題点が挙げられる。それは、ここではその場において Gawain が司祭に

彼の罪をすべて告白したとあるものの、彼が何を告白したかという具体的な内容については一切言及されていないのである。しかし、文字面からはわからないものの、Gawain が緑の帯について一言も触れていないことは明らかである。というのも、仮に彼が帯について何か告白しているならば、司祭は赦免を施す前に、その帯を城主に渡すよう説得するだろうからである。告解の秘跡の後も依然として Gawain が緑の帯を保持しているということは、彼が帯について告白していないことを明示している。

Bertilak 城における告解の秘跡については、これまで実に様々な議論がなされており、それには大きく分けて二つの流れがある。一方は、Gawain が虚偽の告白をしたとしてこの告解の秘跡を非難する立場をとり、もう一方は、Gawain の過ちはささいなものであり告解の秘跡において告白する必要のないものとして、彼を弁護する立場をとっている。¹⁷ ただいずれの立場をとるにせよ、少なくとも Gawain が Bertilak 城の礼拝堂で緑の帯について何も告白していないことは明白である。従って、この告解の秘跡は、先程の Green Chapel でなされたような悔悟の情に満ちたものではなく、むしろ死に赴かんとするキリスト教徒の騎士が行う習慣的なものに過ぎないと考えるべきであろう。

ところが、Gawain が犯した過ちは、先述のように、ロマンスの主人公にあるまじきものなのである。彼は騎士道における最高の美徳である *loyalty* と *prowess* を失い、その結果臆病で不誠実な振る舞いに及ぶ。Gawain は、この過ちを償わねばならないのである。そのためには、正式な形に則っていても日常的な習慣に過ぎないものではなく、たとえ *secular* な形であれ心の底からの痛悔に満ちた告解の秘跡が必要となる。従って、Green Chapel での告解の秘跡のパターンと次に考察する Camelot でのパターンは、Gawain が自らの過ちを告白し償うための場を提供していると考えられる。

ここで再び、作品のエンディングにあたる Gawain の帰還に議論を戻したい。Camelot に到着した Gawain は、Arthur 王をはじめとする宮廷人た

ちを前に、自らが経験した冒険のくさぐさについて語る。そして第一章の冒頭近くで引用した恥辱に苦しむ Gawain の様子の描写の後、彼の台詞が続く。

Pis is þe bende of þis blame I bere in my nek,
 Pis is þe laþe and þe losse þat I laȝt haue
 Of couardise and couetyse þat I haf caȝt þare;
 Pis is þe token of vntrawþe þat I am tan inne,
 And I mot nedez hit were wyle I may last (2506-10)

上記引用に見られる “blame” “couardise” “vntrawþe” 等の語からも伺われるように、この告白が Green Chapel における告白と同じく、告解の秘跡のパターンを踏襲していることは明らかである。その内容に関しても、この第三の告解の秘跡と第二の秘跡、つまり Green Chapel におけるものとはほぼ同じであると言える。強いて違いを探れば、Green Chapel では、過ちを告白する相手が Green Knight ひとりという private penance の形をとっているのに対し、ここでは Arthur 王をはじめとする宮廷人たちを相手とする public penance の形をとっているということぐらいであろうか。ほぼ類似した内容のためか、どちらかと言えば、これまで Camelot での告解の秘跡は、Green Chapel での秘跡よりも軽視されがちな傾向にあると言える。¹⁸

それでは、何故ここで Gawain は再度告解の秘跡を行う必要があるのだろうか。わたしは、この第三の秘跡が第二の秘跡の単なる反復ではなく、むしろ二つの大きな理由により Gawain-Poet が意図的に設けた告解の秘跡の場であると考え。一つ目の理由として挙げられるのは、作品のプロット構成における Gawain-Poet の数に対するこだわりである。特に「三」という数字に対する彼の執着は明白で、それは三日にわたる狩猟と奥方の誘惑、三回のキス、Green Chapel における斧の三度の打ち下ろしなど、作品の随所に見られる。従って、Camelot での告解の秘跡も三度目ということを考え

れば、*Gawain-Poet* が数のバランスを意識していたことは否めない。

もうひとつ考えられる理由は、そしてここにわたしが第三の告解の秘跡こそ第二の秘跡に優る重要性を持つと考える理由があるのだが、*Gawain-Poet* は *Gawain* に、自発的な告白をさせたかったのではないかということである。つまり、*Green Chapel* では *Gawain* は、*Green Knight* に真実を告げられるまで自らの過ちを告白するつもりは毛頭なく、*Camelot* で彼とかわした「首切り」の約束履行のみを唯一の目的としている。従ってここでの告解の秘跡は、自ら進んで行ったというよりも、*Green Knight* に自分の弱さとその結果たる過ちを暴露されたがためにせざるを得なかったものと考えられる。一方、*Camelot* では、彼は聴衆に恥を忍んで自分からその過ちを告白している。ゆえに、この第三の告解の秘跡のパターンの存在意義は、第二の秘跡にはない *Gawain* の告白の自発性にあると言える。さらにまた、既に自分の過ちとその原因の全てを承知している *Green Knight* にその過ちを告白するのと、何も知らずに自分の帰還を歓迎している人々に告白するのとでは、どちらがより大きな精神的苦痛を伴うであろうか。このような過ちを告白する前の *Gawain* の苦悩を考慮すれば、あるいはまたこの第三の告解の秘跡のために *Gawain* の帰還が従来の *return-motif* のパターンから逸脱していることを考慮すれば、これまでややもすれば軽視されがちであった第三の秘跡は、第二の秘跡の単なる繰り返しではなく、より重大な意味を持つことを見過ごすべきではないだろう。

III

以上のように見てくると、恥辱と悔悟の情に満ちた *Gawain* の帰還は、*Gawain-Poet* の意図するところであることがわかる。つまり、主人公 *Gawain* の帰還が、名誉に満ちた英雄の帰還という *return-motif* のパターンから少々逸脱しているのは、*Gawain-Poet* が *Gawain* に心の底からの自発的な

第三の告解の秘跡をさせるために、意図的に return-motif のパターンから逸脱させたのではないか。そして何故 Gawain が告解の秘跡を行う必要があるのかと言えば、繰り返し述べてきたように、彼が騎士としてあるまじき過ちを犯したからに他ならない。この過ちに関しても、主人公が失敗を犯すから彼は理想的主人公像の枠組みから外れているというのを、逆に *Gawain-Poet* が主人公に失敗を犯させるために意図的に理想的主人公像の枠組みから外したと言い換えることはできないだろうか。

例えば、*Piers Plowman* にも見られるように、中世後期では、Cato 以来の “Nemo sine crimine vivit” (いかなる人間も罪無くしては生きることができない) という宗教観が一般に浸透し、それは当時の様々な文学作品にも影響を与えている。¹⁹ この観念の流布と、告解の秘跡というものが十二世紀以降キリスト教における重要な要素の一つになったということは、無関係ではないだろう。人間の肉体は誘惑に屈し易く、その精神は罪を犯し易い。“Nemo sine crimine vivit” という宗教観のもと、*Gawain-Poet* は Gawain を従来どうりの完徳の英雄として描くことを拒絶する。人間は弱き脆き存在であるが故に、たとえ円卓を代表する騎士道の華 Gawain でさえ、過ちを犯さずにはいられないのである。

このようなキリスト教的倫理観故に、*Gawain-Poet* は “pentangle” に象徴される理想的騎士であるはずの Gawain に過ちを犯させる。それでは、この罪無くしては生きることのできない不完全な人間は、いかにその罪を償えばよいのであろうか。わたしは、この問いに対する *Gawain-Poet* の答えが Gawain の帰還に示唆されていると考える。物語のエンディングで、Gawain は心からの告解の秘跡により彼の過ちに対する赦免を受け、再び円卓の騎士の一員として Camelot の宮廷に加わることができる。つまり、*Gawain-Poet* のキリスト教的倫理観である、人間は過ちを犯し易い存在であるが、その過ちは告解の秘跡によって許されるということが示されているのである。ただし、この告解の秘跡は、Bertilak 城でなされたような、形式的に

は正しくとも真の告白を伴わないものではなく、むしろ、たとえ *secular* な形式であれ、心からの痛悔を伴う自発的なものでなければならない。こうした *Gawain-Poet* のキリスト教的倫理観は、第二章において検証した三つの告悔の秘跡が作品中担うそれぞれの役割から明らかになっていると言えるであろう。

おそらく *Gawain-Poet* は、理想的英雄が冒険に見事成功をおさめ輝かしい勝利者として帰還するという、ロマンスのオーソドックスなパターンに不満を持っていたのであろう。なぜなら、彼のキリスト教的倫理観は、完全な人間の存在を否定しているからである。彼と同時代の Chaucer は、*Sir Thopas* という作品をロマンスのパロディとして描き、その中でロマンス作品に共通する一連のパターンを皮肉っている。²⁰ *Gawain-Poet* は、Chaucer のようにロマンスを皮肉の代わりに、その不満箇所である *return-motif* の一部に修正を加え、自分のキリスト教的倫理観に合致するロマンス作品を創作したのである。²¹

ただ、いかに作者のキリスト教的倫理観が *SGGK* に色濃く反映されているように、この作品があくまで娯楽を目的として書かれたロマンスであることに変わりはない。作品には至る所陽気な笑いがちりばめられ、また派手な宴会や荒々しい狩猟の場面の描写が、読者あるいは聴衆を楽しませる娯楽の要素として盛り込まれている。*Gawain-Poet* はあくまでロマンスという文学ジャンルの範囲内で、自分の倫理観に適さない一部のパターンを、自らが首肯し得るものに修正している。ここにロマンス詩人としての作者の独自性が存在すると言えるであろう。*SGGK* が傑作と称えられる所以は、もちろんその確固たる構成力や *alliteration* の力強さ等数多く挙げられる。しかしわたしにとってこの作品の持つ最大の魅力は、この独自性に、つまり理想化、類型化された英雄ではなく、不完全な人間 *Gawain* が描かれている点にこそ存在するのである。

注

※本稿は、1997年6月14日に開催された日本中世英語英文学会第13回西支部例会での口頭発表の原稿に加筆修正を施したものである。

- 1 Dieter Mehl, *The Middle English Romances of the Thirteenth and Fourteenth Centuries* (London: Routledge and Kegan Paul, 1967) 195.
- 2 Return-motifについては、こうしたパターンの常として、当然いくつかの例外の存在を免れ得ない。例えば、Chrétien de Troyesの*Erec and Enide*のエンディングでは、ErecとEnideは一旦Camelotに立ち寄った後、最終的にはErecの国へ帰ることになっている。つまり厳密に言えば、主人公の帰還の地は必ずしもCamelotであると限定できないと言える。
- 3 本稿におけるSGGKからの引用は全て*Sir Gawain and the Green Knight*, ed. J. R. R. Tolkien and E. V. Gordon, 2nd ed., rev. Norman Davis (Oxford: Clarendon P, 1967)に従うものとし、括弧内に行番号を示す。
- 4 Jan Solomon, "The Lesson of Sir Gawain," *Papers of the Michigan Academy* 48 (1963); rpt. in *Critical Studies of Sir Gawain and the Green Knight*, ed. Donald R. Howard and Christian Zacher (Notre Dame: Notre Dame UP, 1968) 270. その他Donald R. Howard, *The Three Temptations: Medieval Man in Search of the World* (Princeton: Princeton UP, 1966) 224にもGawainがジレンマに陥ったとする言及が見られる。
- 5 鈴木栄一『サー・ガウェイン頌』(東京:開文社, 1990) 91では、《lewté=trawþe》と《vnlewté=vntrawþe》の対照という倫理的な相剋は、さらにpentangleと緑の帯との対照という形に具象化されているとしている。
- 6 *OED*が採用した14世紀における用例は、I. 1. aに関しては"1390 CHAUCER *Compl. Damours* 7 On hir, . . . Which hath on me no mercy ne no rewthe That love hir best, but sleeth me for my trewthe." また、I. 2. aは"1330 *Otuel* 311 Selpe me gode . . . Eiper oþer his trewþe pliþ, Vppon morwen for to fiþte."
- 7 Howard Gardnerは*The Quest for Mind* (New York: Alfred A. Knopf, 1973) 36の中で、当時の贈り物の交換に関する認識について、". . . [gift-giving], which expresses in a fundamental way his concept of himself and his relationship to others."と述べている。Gawainはおそらくこのような"relationship"を結ぶことを避けようと、奥方の申し出を拒絶しているのであろう。
- 8 Gervase Mathew, "Ideals of Knighthood in Late-Fourteenth-Century England," *Studies in Medieval History Presented to Frederick Maurice Powicke*, ed. R. W. Hunt, W. A. Pantin, and R. W. Southern (Oxford: Clarendon P, 1948): 358.

- 9 Martin S. Day は *History of English Literature to 1660* (New York: Doubleday, 1963) 45-46 の中で、中世のロマンスの特徴として「騎士の理想化」や「登場人物の類型化」等を挙げている。
- 10 過ちを犯す英雄の例としては、Chrétien の *Lancelot* や *Yvain* 等にも見出すことができる。しかし、ここでの *Lancelot* や *Yvain* の過ちは、その後の彼らの卓越した振る舞いや美徳を際立たせるためのエピソードとして描かれており、その帰還も、パターンどりの名誉に満ちたものであって、自らが犯した過ちに苦悩する *Gawain* の帰還とは大きく異なると言える。
- 11 一方フランスにおいては、*Lancelot* の人気に押されてか、*Gawain* には色好みで粗暴な男というイメージが定着している。B. J. Whiting, "Gawain: His Reputation, His Courtesy and His Appearance in Chaucer's *Squire's Tale*," *Medieval Studies* 9 (1947): 189-234; Keith Busby, *Gauvain in Old French Literature* (Amsterdam: Rodopi, 1980) 参照。
- 12 Geoffrey Chaucer, *The Riverside Chaucer*, ed. Larry D. Benson, based on *The Works of Geoffrey Chaucer*, 3rd ed. (Boston: Houghton, 1987) 170 (v. 95).
- 13 Day 45.
- 14 J. A. Burrow, *Ricardian Poetry: Chaucer, Gower, Langland and the Gawain-Poet* (London: Routledge and Kegan Paul, 1971) 106. その他 John Burrow, "The Two Confession Scenes in *Sir Gawain and the Green Knight*," *MPh* 57 (1959): 75-6; Mary Flowers Braswell, *The Medieval Sinner: Characterization and Confession in the Literature of the English Middle Ages* (London: Associated UP, 1983) 98-9 等がある。
- 15 D. S. Brewer, "The *Gawain*-Poet: A General Appreciation of Four Poems," *Essays in Criticism* 17 (1967): 137 参照。
- 16 例えば、P. J. Field は "A Reading of *Sir Gawain and the Green Knight*," *SPh* 68 (1971) の中で、平教徒への告白について ". . . provisional confession to a layman might be valid when a priest could not be had." (258) と述べている。その他 Gerald Morgan, "The Validity of *Gawain's* confession in *Sir Gawain and the Green Knight*," *RES*, New Series 36 (1985): 2 や Braswell 29 にも同様の記述が見られる。
- 17 *Sir Gawain and the Green Knight*, ed. Israel Gollanz with intro. Mabel Day (London: Oxford UP, 1940) 123 に見られる 1880 行目に関する Gollanz の注には、Bertilak 城における *Gawain* の告解の秘跡を非難する立場が示されている。彼の主張を支持するものとしては、Braswell 97; George J. Engelhardt, "The Predicament of *Gawain*," *MEQ* 16 (1955): 222 等が挙げられる。一方、この

- Gawain の告解の秘跡は、Tolkien and Gordon, rev. Davis 123 における 1882 行目に関する Davis の注や、Michael M. Foley, “Gawain’s Two Confessions Reconsidered,” *The Chaucer Review* 9 (1974): 73; Field: 259 において弁護されている。
- 18 例えば、様々な問題点が指摘される一方で、依然として *SGGK* 研究に多大な影響力を持つ J. A. Burrow の *A Reading of Sir Gawain and the Green Knight* (London: Routledge and Kegan Paul, 1965) 122-59 においても、この第三の告解の秘跡の解釈に割かれる頁数は、第二の秘跡の三分の一程度である。
- 19 William Langland の *The Vision of Piers Plowman: A Critical Edition of the B-Text Based on Trinity College Cambridge MS B. 15. 17*, ed. A. V. C. Schmidt (London: Dent, 1978) xi. 402 に見られるこのフレーズは、田中秀夫、落合太郎編『ギリシャ・ラテン引用語字典 (増補版)』(東京: 岩波書店, 1952) 439 にも採用されている当時ポピュラーであった Cato の Distich (I. 5) からのものである。
- 20 A. K. Moore, “*Sir Thopas* as Criticism of Fourteenth-Century Minstrelsy,” *JEGP* 53 (1954): 532-45; E. R. Eddy, “*Sir Thopas* and *Sir Thomas Norny*: Romance Parody in Chaucer and Dunbar,” *RES* 22 (1971): 401-09; Kenichi Akishino, “Why Is *Sir Thopas* Interrupted?,” *Doshisha Literature* 31 (1983): 1-18 等参照。
- 21 *Gawain*-Poet の作品と目されている他の三作品 *Pearl*, *Cleanness (Purity)*, *Patience* における同質のキリスト教的倫理観についても当然考慮すべきであるが、これは今後の研究に譲りたい。